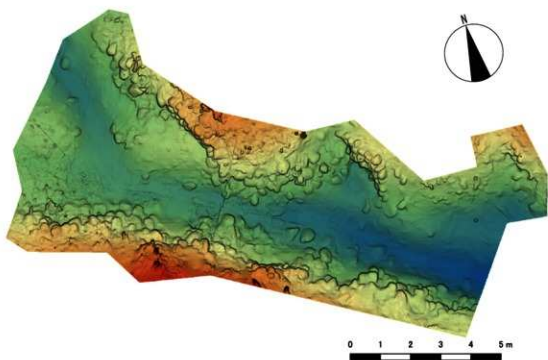


# 町内遺跡詳細分布調査報告書

北海道今金町教育委員会



口絵1 美利河2砂金採掘跡地形段彩図



口絵2 神丘5遺跡採集大型石棒・石斧



# 例言

- 1 本書は、北海道今金町内の遺跡詳細分布調査報告書である。
- 2 本調査は、北海道今金町教育委員会が主体者となり、国の補助を受けて令和4年度および令和5年度に実施した。
- 3 各調査現場における調査期間は下記のとおりである。  
    チャン跡可能性地試掘調査 令和4年8月、令和5年7～9月  
    神丘5遺跡地下探査 令和4年10月  
    美利河2砂金採掘跡および町内砂金採掘跡分布調査 令和5年9～12月延べ日数3日  
    報告書作成業務は令和5年10月から令和6年3月まで今金町教育委員会事務局で行った。
- 4 現地調査での業務分担は次のとおりである。  
    発掘担当者 宮本雅通（今金町教育委員会学芸員）  
    調査員 矢原史希（今金町教育委員会）  
    作業員 遠藤盛人、カトリーナ・カイラ（以上、今金町教育委員会）  
    測量業務委託 株式会社シン技術コンサル
- 5 現地での写真撮影は宮本、遺構のレーザー測量および遺物の実測図作成は矢原が行った。
- 6 採集した遺物や記録類は今金町教育委員会が保管している。
- 7 本書の編集は主に宮本が行い、執筆分担は次のとおりである。  
    I・II-2・V 宮本  
    II-1・III・IV 矢原
- 8 調査にあたり、下記の機関・各位よりご指導ご協力をいただいた。記してお礼申し上げる。  
    北海道教育委員会、国土交通省北海道開発局函館開発建設部、南北海道考古学情報交換会、  
    ピリカ遺跡ボランティアの会、国土地理院応用地理部  
    石井淳平、伊藤幸作、伊藤正行、加藤宏信、加藤弘美、工藤大、黒川拓実、島津富佐夫  
    嶋智也、嶋三喜雄、神野正博、鈴木祐太郎、田才雅彦、寺崎康史、長沼孝、平原真由美  
    前田正憲、宮塚義人（五十音順、敬称略）

# 目次

I 調査の概要	1
1 調査の経緯	1
2 調査の目的と方法	1
II 町内遺跡分布調査	4
1 チャシ跡可能性地	4
2 砂金採掘跡	9
III 美利河2砂金採掘跡	10
1 遺跡の概要	10
2 調査の方法	10
3 調査の成果	10
IV 神丘5遺跡の調査	13
1 帯磁率調査の成果	13
2 採集遺物の概要	13
V まとめ	17
引用参考文献	18

## 表目次

表1 町内遺跡詳細分布調査経過	2
表2 新規登載遺跡一覧	9
表3 神丘5遺跡採集資料観察表	15

## 図版目次

図1 町内遺跡分布図	3
図2 A 地点調査区平面・断面図	5
図3 B 地点調査区位置図	6
図4 C 地点調査区位置図	6
図5 D 地点調査区位置図	7
図6 E 地点調査区位置図	7
図7 F 地点調査区位置図	8
図8 美利河2砂金採掘跡調査区位置図	11
図9 美利河2砂金採掘跡測量図	12
図10 神丘5遺跡帯磁率調査結果	14
図11 神丘5遺跡採集資料(1)	15

# I 調査の概要

## 1 調査の経緯

今金町は北海道南西部の渡島半島に位置し、檜山振興局管内北端の内陸の町である。町域面積 568 km<sup>2</sup> の約 8 割を森林が占め、畑作・稲作・酪農などの農業を基幹産業とする町である。町の中心域に広がる盆地状の平野を渡島半島唯一の一级河川・後志利別川が流れ、日本海へ注いでいる。平野の北側には 1,500m 級の狩場山地、南側には 1,200m 級の遊楽部山地があるため風が抜けやすく、寒暖差の大きい気候的特徴がある。

今金町における埋蔵文化財分布調査は、昭和 62・63 年度に今金町教育委員会（以下、「町教委」）が町内全域を対象に行ったものがある（今金町教育委員会 1989）。この時点で 54 か所の埋蔵文化財包蔵地を把握した。その後、国道改良工事に伴う宮島 1 砂金採掘跡の調査（今金町教育委員会 2010）等で都度追加登載を行い、令和 5 年 12 月時点で 59 か所を把握したところである（図 1）。

しかしその間、神丘 5 遺跡（登録番号 18）では、土地所有者から採集品の大型石棒や大型磨製石斧の寄贈を受けた。これらの採集資料は当遺跡が縄文時代の大規模集落であることを示唆するものであるが、当遺跡は発見当初から農地整備による地形改変が著しいため、早期に地下遺構の残存状況を把握するとともに、将来的な遺跡の保全策が必要な状況にある。

平成 7 年度に日本ナショナルトラストが行った分布調査では、後志利別川沿いの段丘面上に複数の砂金採掘跡が確認され（日本ナショナルトラスト 1996）、地域住民からも砂金採掘跡の所在情報が複数寄せられていたが、それぞれについて町教委としてその所在調査や範囲確認はできていなかった。

平成 29 年度、道南地域のアイヌ文化に関わる基礎的調査の一環で、古文書に記載のあるチャシ地名に基づく現地踏査（宮本 2018）や、令和 3 年度には航空写真の写真測量によるチャシ跡分布調査（宮本・宮塚 2021）が行われた。こうした現地踏査による地形判断により、チャシ跡の可能性が高い区域（以下、「チャシ跡可能性地」）を後志利別川流域沿いに複数か所把握するに至った。しかし、これらについてはそれぞれ試掘調査を行い、専門家の評価も踏まえた上で存否を確認することが必要な状況にある。

砂金採掘跡に関しては、令和 4 年 10 月に「今金・美利河の金山遺跡」が NPO 法人北海道遺産協議会によって北海道遺産に選定された。この遺産名称の主体をなすものは美利河 2 砂金採掘跡（登録番号 15）で、遺構が良好に残る部分は見学地として好適なため、町教委は教育利用や観光活用を視野に入れた整備を予定している。しかし、見学利用を想定する区域は未調査であり、詳細な把握調査が必要な状況にある。

以上のとおり、昭和 62・63 年度の分布調査から 30 年以上が経過する中で、改めて調査を行う必要のある箇所が累積しており、それら埋蔵文化財全般の将来的な保全やその後の活用のための基礎資料を得ることを目的とし、重要度の高いものから計画的に分布調査を実施することとした。

## 2 調査の目的と方法

### チャシ跡可能性地

町教委による事前調査で、江戸時代末期に松浦武二郎が記したチャシ地名「チャシウシナイ

(チャシ・ある・沢)」に該当すると思われる場所を中心として、航空写真を利用した写真測量により得た推定図をもとに、後志利別川沿いの6地点を調査対象とした。この他にも本流域沿いに候補地はあったものの、現代の農地整備や道路建設等による開発行為で地形の改変が著しく、今回の調査対象から外した。

前述の6地点の呼称は、便宜的に後志利別川上流側からそれぞれA、B、C、D、E、F地点とした。それぞれ現況で塚状地形をなしている場所や図面上で塚に該当する場所に対し、塚に直交するように幅1m前後、長さ2～5m前後のトレンチを設けて試掘し、土層の堆積状態や人為的な掘り込みの痕跡の有無を確認することとした。

令和4年度はB、E、F地点の順に調査した。F地点では、試掘面積が限定的で遺構かどうかの判断ができず、さらに周辺の試掘調査が必要なことから、判断を保留し、翌年度に継続調査することとした。令和5年度はD、A、C、F地点の順に調査した。

#### 美利河2砂金採掘跡 (C-10-15)

将来的な遺跡の現地整備の一環として、解説案内板への利用を目的とし、遺構が良好に残る部分のみに限定したレーザー測量を行った。令和5年秋季に実施した。

また、既往調査や地域住民からの情報で、所在が予想されている後志利別川流域の砂金採掘跡については、令和5年度秋季にそれぞれ現地踏査を行い、砂金採掘跡特有の遺構の有無を頼りに可能な限り所在確認を行うこととした。

遺構範囲の確認にあたっては、国土地理院が令和4年度に行った航空レーザー測量データを利用して周辺地形の現況図を作成し、町教委が現地で確認した遺構と対応する一連の水路状地形の範囲を遺跡の範囲とした。

#### 神丘5遺跡 (C-10-18)

現況は畑地で、農地として利用されているため、収穫後の令和4年10月に地下探査調査を行った。探査には田中地質コンサルタント製の携帯型帯磁率計 WSL-C を使用した。この機器は磁性を帯びたものに高い反応を示す測定器で、人間活動に伴う焼成により土や礫の帯磁率が高まることを利用するもので、遺跡探査における有効性が示されている(田中2008)。調査対象区域を等間隔に網羅的に測定し、遺構の残存状態を推定するのに有効と判断し、この方法を採用することとした。

なお、地下探査にあたっては、すでに農地整備で大きく地形が削平されていることが明らかたため、より改変の影響が少ないと思われる東側半分を調査対象区域とした。

表1 町内遺跡詳細分布調査経過

名称	調査目的	調査方法	調査期間
チャシ跡可能性地	所在確認	トレンチによる試掘	令和4年8月2日～10日 令和5年7月31日～8月9日 令和5年9月2日～4日
美利河2砂金採掘跡	遺構の詳細記録	遺構面のレーザー測量	令和5年12月9日
砂金採掘跡	所在確認	踏査	令和5年9月16日・23日
神丘5遺跡	地下遺構の状況把握	帯磁率計による地下探査	令和4年10月17日～20日

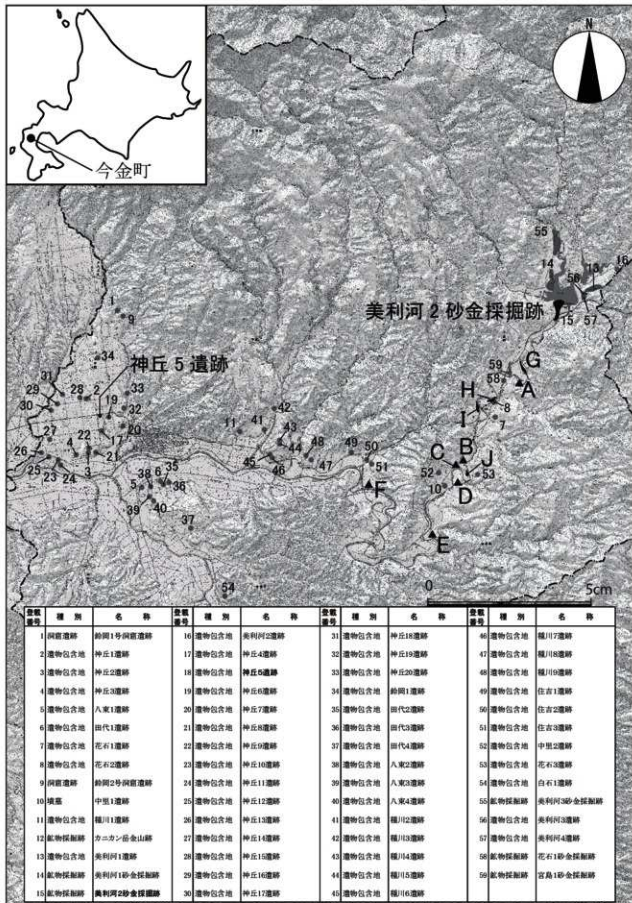


図1 町内遺跡分布図



## II 町内遺跡分布調査

### 1 チャシ跡可能性地

#### 調査の概要

A地点は蛇行する後志利別川が90度近く流路を変える大屈曲付近に突出した台地の先端部に位置する。調査区の位置する台地は先端部を旧国道によって削られ急峻な切り通しとなっているが、旧地形図との比較などから大きく地形が改変されたわけではないと判断できる。現地踏査によって壕状の地形が台地先端に確認されたほか、広さ8㎡前後深さ3m前後のコの字状に掘り窪めたような地形が台地の尾根沿いに連続して存在することが確認された。B、C地点はチャシウシナイと記述された場所付近と推定される地点であり、後志利別川右岸の舌状台地の付け根付近に位置する。現地は切通しとなっているが、道路で寸断された南東部の先端に壕状の地形が確認された。D地点は後志利別川と支流の珍古辺川との合流地点によって切り開かれた台地上に位置し、本流に面した東側の先端部分に航空写真測量により一条の壕状地形が確認された。現地は畑地となっているが航空写真測量で確認された壕状地形が位置する場所は耕作地である。E地点は松浦武四郎によってアシコベツと記述された場所付近と推定される地点である。後志利別川左岸の低位段丘上に位置し、現地は一部耕作地となっている。航空写真測量では2条の壕状地形が確認された。F地点は住吉神社の敷地内に所在している。後志利別川右岸の舌状台地の先端に位置し、台地の南側は侵食により険しい崖となっている。航空写真測量では2条の壕状地形が確認された。

調査区の計測はトータルステーションに加えLiDARを使用したレーザー計測を実施した。機材はiPad Proを使用し、計測のためのアプリケーションはScaniverseを使用している。データはPLY形式で出力したものをCloudCompareで編集、2cmメッシュのDEMを作成した後、QGISで図化を行い20cm間隔の等高線を作成した。また、背景図として国土地理院が提供している5m間隔の標高メッシュから2m間隔の等高線を作成し、測量成果と重ね合わせた。

#### 調査の結果

試掘の結果、いずれの地点においてもチャシ跡と考えられる人為的痕跡を確認することはできなかったが、状況の事例としてA地点における試掘成果について報告する。

A地点ではTR1～6までの計6か所にトレンチを設定した(図2)。壕状地形、コの字状地形の堆積状況を確認するためそれぞれにTR1、TR2を設定し、壕状地形周辺に遺構が存在しないか確認するため北西平坦部にTR3～6を設定し調査を行った。TR1の土層は4層に区分される。I層は表土層である。II層は黒褐色土層。III層はブロック状の暗赤色火山灰質土を挟んだ茶褐色土層である。IV層は灰色から黄褐色のシルト質の層である。同様の堆積状況は平坦部に位置するTR3～6にも見られ、いずれのトレンチにおいても遺構や遺物を確認することはできなかったことから、これらの堆積は全て自然の営みによるものであり当該地形は自然地形であると判断した。一方で、TR2ではごく薄い表土層の直下から地山と考えられる黄褐色土層と礫層が確認されており、TR1で確認されたII～IV層が欠落することから人為的な掘り込みによる地形の可能性があることがわかった。調査地点の北側に架かる橋は瑪瑙橋と呼ばれており、明治から昭和前期にかけて近隣で行われた瑪瑙採掘に由来する橋名と考えられるが、地域住民からの聞き取りや過去の史料には本調査地点で瑪瑙採掘が行われた記録はなく、コの字状の掘り込みがどのような要因で形成されたかについては不明である。礫層中の礫は珪岩、あるいは珪化岩が多数を占めており、メノウや

玉髄は確認できなかった。

TR1、TR3～6で確認されたブロック状の暗赤色火山灰質土はE、F地点でも確認されており、堆積範囲は少なくとも直径10 km前後に達する。住吉神社敷地内に位置するF地点で採取したⅢ層中の暗赤色火山灰質土およびⅣ層の分析を株式会社パレオ・ラボに委託したところ、いずれも駒ヶ岳D火山灰(Ko-d)を含むとする結果が得られた。Ⅳ層とⅢ層中の火山灰質土の間には黒褐色土を挟んでいることからⅢ層中の火山灰質土ブロックは二次堆積によるものと考えられる。町内の遺跡でKo-dが検出された遺跡は今金町北東部に位置するピリカ遺跡のみであり、ピリカ遺跡ではKo-dは軟質の灰白色火山灰として少量が部分的に確認されるのみであった(今金町教育委員会2002)。今回の調査のように広域にわたって散布する暗赤色のブロックとしてKo-dが確認される事例は近隣市町村を含めても存在せず、今回確認された土層がどのような要因で形成されたかについて検討することが今後の大きな課題となる。

その他の調査地点のトレンチ位置は図3～5の通りである。

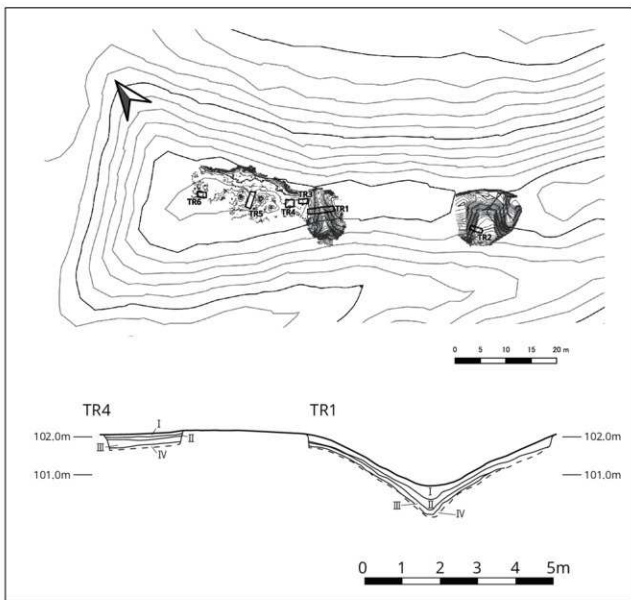


図2 A地点調査区平面・断面図



图 3 B地点調査区位置図

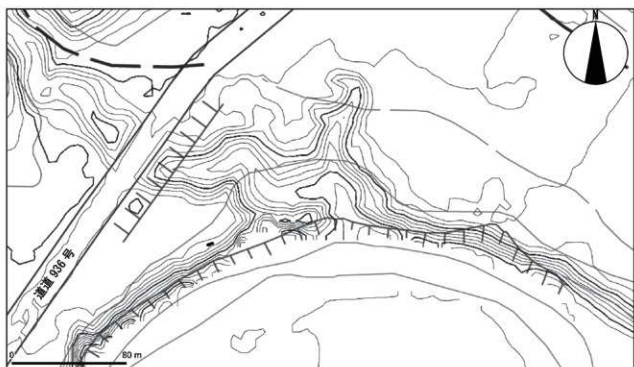


图 4 C地点調査区位置図



图 5 D 地点調査区位置図



图 6 E 地点調査区位置図

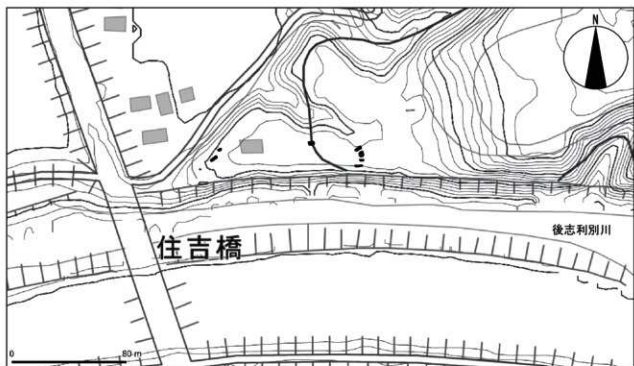


图7 F 地点調査区位置图

## 2 砂金採掘跡

前節のチャシ跡可能性地の調査中、付随して砂金採掘跡を新たに2か所発見した。また、平成7年度の日本ナショナルトラストによる調査（日本ナショナルトラスト1996、以下「トラスト報告」）で把握されていた未登録の2か所についても現地踏査し、現況と範囲を確認した。それぞれ、現地踏査による観察所見を以下のとおり報告する。併せて、前述のトラスト報告に記載の遺跡名を一部変更し、表2のとおり令和6年1月に埋蔵文化財包蔵地として登録した。

### 宮島2砂金採掘跡（図1-G）

トラスト報告で宮島1砂金採掘跡とされた区域で、後志利別川右岸段丘面上の標高82～101mに立地する。現河床面との比高は最大20mを測る。東西95m、南北511mの細長い範囲に複数の石垣状の水路跡、すり鉢状のくぼんだ地形、マウンド状の石積を複数確認した。トラスト報告時と比べ、分布範囲がより北側に広がることを確認した。現況は山林である。西側は国道230号によって削平されているが、損壊程度は軽度とみられる。北側は国鉄漸棚線、国道230号によって損壊しており、遺跡はさらに北側に伸びていた可能性が高い。

### 花石2砂金採掘跡（図1-H）

トラスト報告で花石2砂金採掘跡とされた区域で、後志利別川左岸段丘面上の標高74～80mに立地する。現河床面との比高は最大12mを測る。長軸方向で東西377m、南北84mの範囲に石垣状の水路跡、マウンド状の石積を複数確認した。トラスト報告時と比べ、分布範囲はより東側に広がることを確認した。現況は山林である。遺跡はその南東側を国鉄漸棚線および同軌道が国道230号に転用された高規格道の工事により損壊している。

### 宮島3砂金採掘跡（図1-I）

今回の分布調査で確認した遺跡で、後志利別川右岸段丘面上の標高70～76mに立地する。現河床面との比高は最大6mを測る。東西96m、南北422mの範囲に石垣状の水路跡、すり鉢状のくぼんだ地形、マウンド状の石積を多数確認した。全般的に遺構の保存状態は良好で、大規模なものも多く、その点で美利河地区に分布する各砂金採掘跡とよく共通している。現況は山林である。遺跡の西側は農地開発によって損壊しているが、損壊程度は軽度とみられる。

### 中里1砂金採掘跡（図1-J）

今回の分布調査で確認した遺跡で、後志利別川右岸段丘面上の標高59～71mに立地する。現河床面との比高は最大12mを測る。東西93m、南北195mの細長い尾根状の範囲に石垣状の水路跡とそれに伴う堰、マウンド状の石積などを複数確認した。現況は山林である。尾根状の段丘面を南北に通る幅約3mの農道によって遺跡は損壊しており、また南側一帯は畑地として削平されているため、より南側に遺跡が広がっていた可能性が高い。

表2 新規登録遺跡一覧

図1	登録番号	種別	名称	内容	現況	トラスト報告の記載名
G	60	鉱物採掘跡	宮島2砂金採掘跡	水路、石垣状遺構	山林	宮島1砂金採掘跡
H	61	鉱物採掘跡	花石2砂金採掘跡	水路、石垣状遺構	山林	花石2砂金採掘跡
I	62	鉱物採掘跡	宮島3砂金採掘跡	水路、石垣状遺構	山林	
J	63	鉱物採掘跡	中里1砂金採掘跡	水路、石垣状遺構、堰	山林、農道	

# Ⅲ 美利河 2 砂金採掘跡

## 1 遺跡の概要

美利河 2 砂金採掘跡は現在の美利河ダム南側、後志利別川とチュウシベツ川の合流地点に面した低位段丘上に位置する。昭和 56 年に北海道埋蔵文化財センターによる調査が行われており、ダム建設によって破壊される区域を対象に 66,800 m<sup>2</sup>について測量および試掘調査が実施され（北海道埋蔵文化財センター 1989）、また本遺跡以外にも近隣の美利河 1 砂金採掘跡（北海道埋蔵文化財センター前掲）、美利河 3 砂金採掘跡（今金町教育委員会 1991）、宮島 1 砂金採掘跡（今金町教育委員 2010）で開発に伴う測量調査が行われており、水路、石垣、採取場などを備えた江戸時代初期の頃の所産と考えられる砂金採掘跡の特徴や各遺構の性格などが整理されてきた。

調査区は町指定区域約 33,000 m<sup>2</sup>のうち特に良好に遺構が残存している 100 m<sup>2</sup>であり、遺構の現況について記録調査を実施した。調査区の位置は図 8 の通りである。調査区の標高はおおよそ 114.5 m ～ 116.8 m である。

## 2 調査の方法

石垣の精密な形状や水路の構造を可能な限り客観的に記録するため、LIDAR を用いた三次元計測による調査を実施した。使用機材は iPad Pro であり、計測のためのアプリケーションは Scaniverse を使用している。計測したデータは OBJ 形式で出力して CloudCompare で処理をした。当初は計測によって得られた点群をそのまま利用したが、多数のすき間を有しながら立体的に積み重なっている石垣では点群の粗密によって上下の標高が入り混じったモザイク状の DEM が出力されてしまうなど正常な DEM を得ることができなかったため、3D モデルのメッシュ上に 1,000,000 点のランダムな点群を再展開し点群密度を平均化したものを利用した。基準点測量は株式会社シン技術コンサルに委託し、打設した杭から幾何補正用の対空標識の平面直角座標を計算している。DEM は 1cm メッシュで作成し、段彩図に傾斜量図を重ねたものを原因とした。

## 3 調査の成果（図 9）

北西から南東へ向かって傾斜する水路とそれに沿うようにやや角度をつけて築かれた石垣を明瞭に確認することができた。石垣は水路を挟み上流側に向かってハの字状に広がるように一定の間隔で構築されており、更に水路左岸側の各石垣の手前には三角形のテラス部が設けられている。最も東側の石垣はほとんどが土砂に埋まっており上部のみが露出している状態だがテラス部は最も広く、西側のものほど完全に露出しテラス部が狭くなっている。水路を挟んで北側の石垣は 4 ～ 6 段ほどで隙間が多く積み方には規則性は見られないが、概ね 0.6 ～ 0.8 m と一定の高さで垂直に築かれるなど比較的精緻に積み上げられている一方、南側の石垣は 2 ～ 4 段と段数が少なく積み方も複雑である。また、調査区中央付近の水路幅が最も狭くなる場所では水路を挟んだ両脇の石が崩れたような外観を呈しているが、ここに水を貯めるため石積みで堰を設けていた痕跡かもしれない。

水路としたものは深さ 0.2 ～ 0.3 m ほどであり既往調査で確認された水路と比較すると浅いものの、1.6 m ～ 1.8 m ほどの幅で直線的に調査区を巡っており、明らかに一定の幅で人為的に掘り込まれたものと思われる。調査区西端で西からのものと北西方向からのものが合流するような構造となっているが西側から流入するものは形状がやや不明瞭となっており、水路の新旧関係を示している可能性がある。

既往調査では水路に沿う護岸目的の石垣や石積みの崩れ防止のため乱雑に積み上げた石垣の

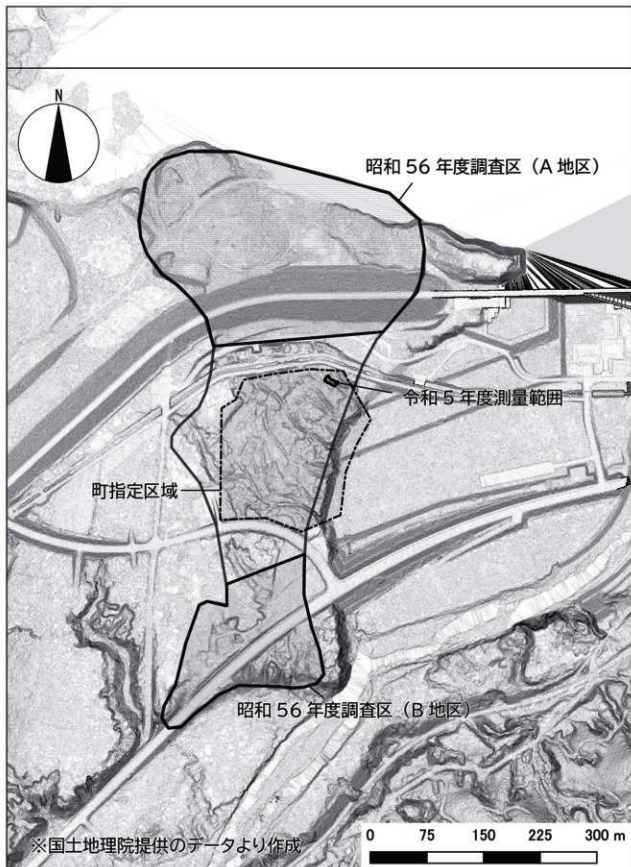


図8 美利河2砂金採掘跡調査区位置図



存在が指摘されているが、水路上流側に向かって開くように規則的に石垣が構築される例は知られていない。砂金採掘跡での芝金採取作業の実態を含めて不明な点が多く、今回確認できた石垣がどのような機能であったかの推定は難しい。三次元的なデータとして砂金採掘跡全城を記録し、石垣の配列状況や地形の傾斜方向などを客観的な情報として蓄積していくことが今後の課題となる。

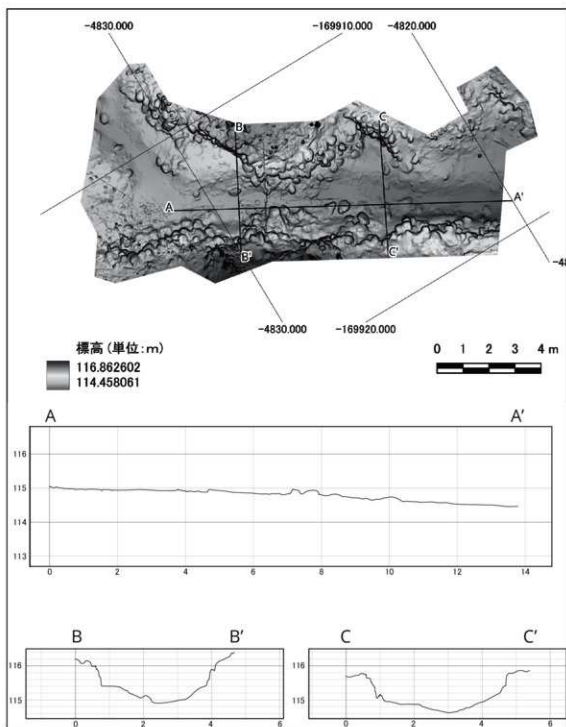


図9 美利河2砂金採掘跡測量図

## IV 神丘5遺跡の調査

### 1 帯磁率調査の成果

本遺跡は南に後志利別川、東に後志利別川支流のトマンケシナイ川、西に同支流の利別目名川が流れる三角形の台地の南東部、標高55 m前後の緩斜面上に位置する。遺跡のすぐ東側にはトマンケシナイ川に向かって開かれた深い沢の沢頭があり、南側の平坦部には神丘4遺跡が、沢を挟んで対岸には神丘6遺跡が存在している。現地は耕作のため削平されているものの、大型の石棒や石斧未成品が土地所有者によって採集されたことから大規模な遺構の存在を想定し、遺物の埋没状況や遺構の残存状況を検討するための地下探査を実施した。採集された大型石棒や石斧がいずれも緑色岩系の石材を使用していることから、変成岩に対して高い反応性を示す帯磁率を測定することとし、遺跡の東半分のおよそ9,300m<sup>2</sup>を調査区とした。グリッドは近隣遺跡が範囲に含まれるように東西方向へアルファベット、南北方向へアラビア数字を用いて設定し、アルファベットは20 m間隔で付与したA～Zと5 m間隔で付与したa～dを組み合わせてAa.Ab.Ac.Ad.Ba…となるように表記した。

帯磁率はMa-0の地点で計測した場合を100とした時の相対的な帯磁率として値を求めた。計測はMc列からOd列まで、0ラインから54ラインまでの平坦部の各グリッド交点の地表で実施し、3回計測した際の平均値を採用した。その結果を航空写真測量から復元した旧地形図上に示したものが図10である。大きく調査区北東部と南東部の2か所で非常に高い数値が集中することが確認された。いずれも旧地形図上では沢が確認される場所であり、耕作時に押された土や石が溜まっていると推測される場所である。屋外の耕作地であることから得られたデータには様々なノイズが混入しており、この成果をそのまま解釈することはできないが、今後の調査を行う場合に今回のデータを踏まえて調査箇所の検討を行いたい。

### 2 採集遺物の概要(図11)

調査中に採集された44点の遺物の内訳は、土器2点、石器39点、陶磁器3点である。土器はいずれも小破片で風化が激しく、詳細は不明である。石器39点のうち3点を図化した。1は暗緑褐色の珪質頁岩製の挿器である。厚みのある寸詰まりの剥片を素材とし、側縁に厚手の刃部を作出している。素材となる剥片は表裏両面の主剥離面がポジティブとなる特徴的な剥片である。表裏の主剥離面とも同一の打面から剥離されており、一度の打撃によって表裏両面で剥離が発生したと思われる。2は1mmほどの球顆を含む黒曜石製の錐形石器である。先端部は欠損している。亜円礫の平坦部を打面として剥離されたやや厚みのある寸詰まりの剥片を素材とする。3は珪質頁岩製のつまみ付きナイフ。つまみ部は欠損している。縦長剥片を素材とする。素材主剥離面の右側縁に急斜度の調整を施した部位を打面とし、素材背面左側縁に対して平坦な角度から器体調整を行っている。調整の手順から、縄文時代早期後半から前期前半に見られる松原型(秦1991)と考えられる。このほか、二次加工剥片、ノッチなどが採集されているが、旧石器時代のものと考えられる資料は含まれていない。

これらに加え、土地所有者によって大型石棒2点、石斧未成品2点が採集されている。4はやや変成した安山岩製の無頭石棒で両端部が浅くくぼみ、器体全体は紡錘形を呈している。表裏または上下の区別が可能な装飾は施されていない。5は緑色凝灰岩製の石棒で、片側の端部が欠損しているが、その他の形態的特徴は4と酷似している。これらは茅野の分類(茅野2013)によれば端部彫刻石棒の一群に相当し、中期中葉～後葉の頃のものとされている。北海道南部では北斗市館野遺跡C地区で同種の形態の石棒が出土しており、中期後半の所産と判断されている

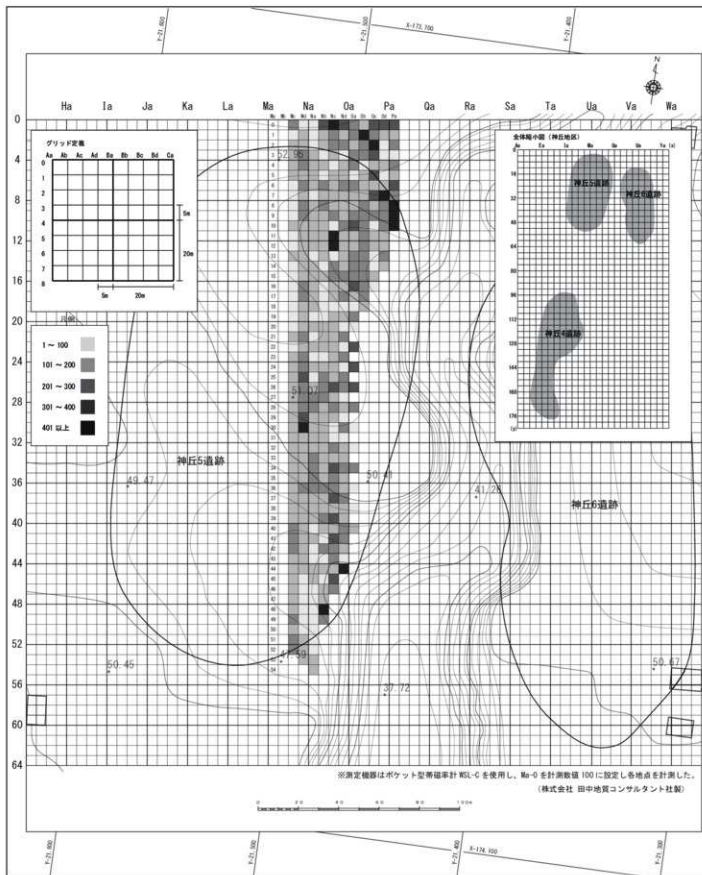


図 10 神丘 5 遺跡帯磁率調査結果

(北海道埋蔵文化財センター 2014)。6 は縞模様のある緑色岩製の石斧未成品である。断面がひし形となる棒状の原石を素材とし、稜線部を打面として調整を行った後研磨によって器体を整形している。7 は6 と同一供給源と考えられる緑色岩製の棒状原石である。一部に剥離が見られるものの、全体として加工はごく僅かである。断面形状やサイズが5 と近いことや同一の石材であることから、大型石斧用の材料として遺跡に持ち込まれたものと考えられる。

表3 神丘5 遺跡採集資料観察表

No	図版番号	種別	層位	遺物名	重量(g)	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
K5.R4.02	1	石器	表探	棒器	34.5	珩質頁岩	5.30	1.73	1.47	
K5.R4.04	2	石器	表探	石鏃	15.0	黒曜石	4.48	4.38	1.06	
K5.R4.16	3	石器	表探	つまみ付きナイフ	6.0	珩質頁岩	4.22	1.96	0.63	棒原型、上部欠
K5.S.01	4	礎石跡	表探	石棒	4400	安山岩	37.94	9.52	9.55	
K5.S.02	5	礎石跡	表探	石棒	3015	緑色凝灰岩	38.82	9.10	8.67	上部欠
K5.S.03	6	礎石跡	表探	石斧未成品	2790	緑色珩岩	38.79	8.54	6.34	
K5.S.04	7	礎石跡	表探	石斧未成品	2900	緑色珩岩	40.13	7.74	6.85	

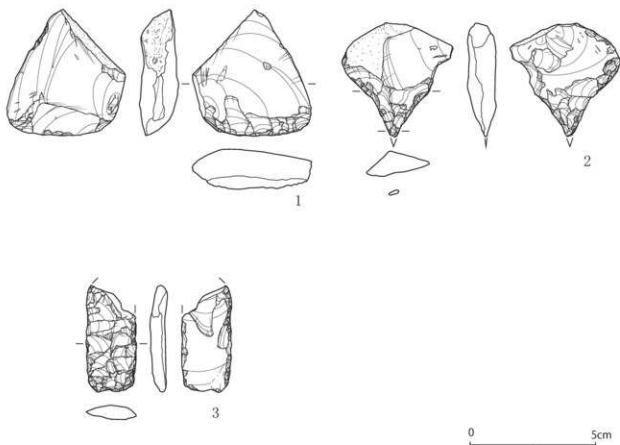


図11 神丘5 遺跡採集資料(1)

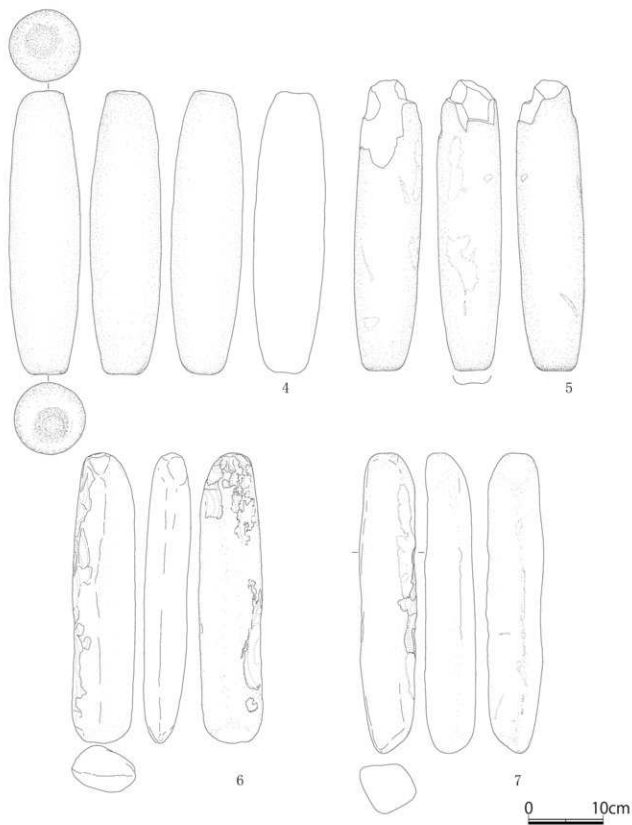


图 12 神丘 5 遺跡採集資料 (2)

## V まとめ

今金町教育委員会が令和4年度から5年度の2か年にわたり実施した分布調査の成果を次のとおり報告し、まとめとする。

幕末の古文書に記されたチャシ地名の該当地点および航空写真を利用した写真測量で認識したチャシ跡のように見える地点について、事前の現地踏査によって6か所を選定し、遺構・遺物の存否を確認するための試掘調査を行った。その結果、いずれも自然地形と判断した。その根拠としては、①塚状地形に設定したトレンチの土層断面の状態が付近の自然堆積層と同じであること、②塚状地形の床面の形状が人為的でないこと、③掘り上げ土や柵列に伴う柱穴が認められないことなど、試掘したすべての地点で人為的痕跡を確認することができなかったことが挙げられる。

事前踏査では、他にチャシ跡としての立地的特徴をもつ有力な地点も認められたが、すでに農地等として地形が大きく改変されているため、調査対象としなかった。これらについては開発行為によりすでに遺構が失われた可能性も考えられる。いずれにしても、今回の一連の調査によりチャシ跡でなかったことが明らかとなった。後志利別川流域における今金町域でのチャシ跡可能性地の調査は、踏査自体は必要に応じて継続するものの、試掘については今回をもって一区切りとした。

神丘5遺跡は昭和期の農地整備により地形が大きく削平されているが、遺跡内での採集資料に大型石棒や大型磨製石斧があり、縄文時代の大規模な集落遺跡である可能性が高い。今後の保全方法の検討材料を得る目的で、帯磁率計による地下探査を行い、遺構・遺物の遺存状況の把握に努めた。地形改変の影響が比較的少ないとみられる東側の9,300 m<sup>2</sup>を対象に実施した結果、沢頭に近い遺跡東端付近に礎が多く存在する可能性が高いことが明らかとなった。

ただし、当区域は旧地形図上では浅い沢に当たる場所で、農地整備による攪乱の可能性も考えられるため、今回の測定結果をそのまま適用することには慎重とならざるを得ない。埋蔵文化財保護の観点から、今回の調査成果を土地所有者に周知し、注意を促すとともに、今後調査を行う場合の基礎資料を得たことは成果として挙げられる。

なお、今回の地下探査の調査中、新たに多くの採集資料を得た。遺物の特徴から、縄文時代早期に特徴的な石器も含まれ、中期から後期とするこれまでの帰属時期に関する認識を改めることとなった。また、調査の発端となった大型石製品については、本報告書内に実測図及び写真を掲載し、観察所見を添えて報告した。

美利河2砂金採掘跡については、その保存状態の良さや立地上の利点から、町教委は将来的に一般の見学利用を想定した整備を計画している。その準備段階として、整備予定区域に当たる遺構100 m<sup>2</sup>を対象にLiDARを用いた三次元計測を行った。その結果、石垣の精密な形状や水路の構造に関する平面図及び各種断面図を作成することができた。また、取得した精細なデータをもとに表面状態の詳細を把握することができた。今回は試掘を伴わない表面的な測量であり、また小範囲に限られたため、当遺構の機能的役割については不明な部分が多く残された。これについては、美利河2砂金採掘跡全体として俯瞰的な観点から推測することが有効なため、今後その周囲に広がる未調査区の調査を進める必要がある。

今回の分布調査では、新たに2か所、既往調査での未登載2か所の計4か所の砂金採掘跡を確認した。これらの現況はいずれも山林で、笹に被われた状況であるが、地表面に露出してい

る石垣状の水路跡やすり鉢状のくぼんだ地形、マウンド状の石積等を確認した。いずれも明らかかな人為的痕跡と判断される。これらの各遺構の特徴は、これまでに報告されてきた後志利別川上流域の段丘面上に残る砂金採掘跡と特徴がよく共通することから、今回把握した4か所についても江戸時代前期に松前藩によって行われた一連の砂金採掘の痕跡と考えるのが自然である。特に中里地区における砂金採掘跡の発見は初となるもので、砂金採掘跡の分布南限を更新することとなった。具体的には、宮島1砂金採掘跡から起算して約4kmの更新、最北端に当たる美利河3砂金採掘跡を起点とした場合、流域延長約14kmにわたって砂金採掘跡が分布することが明らかとなった。

ただし、今回確認した各遺構は、現地踏査という方法で分布範囲を把握しただけであり、各遺構の詳細な位置関係や形状、規模、機能的役割等については不明である。また、さらに後志利別川の下流へと砂金採掘跡の分布域が広がるのかどうかについても不明であり、今後も引き続き現地踏査を行う必要がある。

#### 引用参考文献

- 今金町教育委員会 1989『今金町の遺跡 北海道今金町遺跡分布調査報告書』今金町文化財調査報告1
- 今金町教育委員会 2010『宮島1砂金採掘跡 一般国道230号今金町国縫道路工事に伴う発掘調査報告書』今金町文化財調査報告6
- 茅野嘉雄 2013「三内丸山遺跡の石刀類・石棒について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』(16) 17-26 青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室
- 田中保士 2008「考古探査による考古地盤の分析」『考古学ジャーナル』580
- 日本ナショナルトラスト(編) 1996『美利河・花石の砂金採掘跡』
- 秦 昭繁 1991「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙—松原型石匙の分布と製作時期について—」『考古学雑誌』76(4) 359-387 日本考古学会
- 北海道埋蔵文化財センター(編) 1989『今金町美利河1・2砂金採掘跡』北理調報第59集
- 北海道埋蔵文化財センター(編) 2014『館野2遺跡C地区』北理調報第303集
- 松浦武四郎著 高倉新一郎校訂 秋葉実解説 1982『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 下』北海道出版企画センター
- 宮本雅通 2018「今金町におけるアイヌ文化に関わる基礎的調査」『和入地とその周辺のアイヌ文化に関する基礎的研究 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 アイヌ関連研究事業研究助成(一般研究) 研究概要報告書』
- 宮本雅通・宮塚義人 2021「空中写真を利用した地形測量による遺跡探査の試み」『南北海道考古学情報』第15号



1 塚状地形現況（北東から）



2 A地点塚状地形 TR1 の土層堆積状況（南西から）



3 A地点 TR4 完掘状況（西から）



4 A地点 TR2 完掘状況（東から）



5 宮島 2 砂金採掘跡現況



6 宮島 2 砂金採掘跡空撮（南から）



7 花石 2 砂金採掘跡現況



8 花石 2 砂金採掘跡空撮（南西から）





9 宮島3砂金採掘跡現況



10 宮島3砂金採掘跡空撮(南から)



11 中里1砂金採掘跡現況



12 中里1砂金採掘跡空撮(南から)



13 美利河2砂金採掘跡現況(南西から)



14 美利河2砂金採掘跡現況(西から)



15 美利河2砂金採掘跡現況(北西から)



16 神丘5遺跡地下探査作業風景(南から)

## 報告書抄録

ふりがな	ちょうないいせきしょうさいぶんぶちょうさほうこくしょ							
書名	町内遺跡詳細分布調査報告書							
副書名								
シリーズ名	今金町文化財調査報告							
シリーズ番号	7							
編著者名	宮本雅通・矢原史希							
編集機関	今金町教育委員会							
所在地	〒049-4308 北海道瀬棚郡今金町字今金48番地1 TEL 0137-82-3488							
発行年月日	2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
美利河2 砂金採掘跡	北海道瀬棚郡今金 町字美利河41-22	C-10	15	42° 28' 13''	140° 11' 27'	20241209	100	詳細分布 調査
神丘5遺跡	北海道瀬棚郡今金 町字神丘617番地1	C-10	18	42° 26' 06''	139° 59' 20''	20231017 ～ 20231020	9,300	詳細分布 調査
所収遺跡名	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
美利河2砂金採掘跡	鉱物採掘跡	江戸時代	水路状遺構他		なし		遺構レーザー測量	
神丘5遺跡	遺物包含地	縄文時代	なし		大型石棒、磨製石斧、つまみ付きナイフ他		地下探査	
宮島2砂金採掘跡	鉱物採掘跡	江戸時代	水路状遺構他		なし		踏査により確認	
花石2砂金採掘跡	鉱物採掘跡	江戸時代	水路状遺構他		なし		踏査により確認	
宮島3砂金採掘跡	鉱物採掘跡	江戸時代	水路状遺構他		なし		踏査により確認	
中里1砂金採掘跡	鉱物採掘跡	江戸時代	水路状遺構他		なし		踏査により確認	
要約	<p>古文書の記録や航空写真に基づく地形測量により推定されたチャシ跡の可能性のある区域6か所を対象に試掘した結果、いずれも人為的な痕跡を確認できず、すべて自然地形と判断した。今回の分布調査に付随した現地踏査により、新たに2か所の砂金採掘跡を確認し、既往調査で把握されていた2遺跡と合わせて計4遺跡の分布範囲を把握した。美利河2砂金採掘跡の中で良好に遺構が残存する区域に限定してレーザー測量を行い、遺構の詳細を把握することができた。</p> <p>神丘5遺跡の東側半分で帯磁率計による地下探査を実施した結果、より東側に何らかの遺構ないし遺物が残存する可能性が高いことが把握された。</p>							

今金町文化財調査報告 7

---

## 町内遺跡詳細分布調査報告書

2024年3月31日発行

発行 今金町教育委員会

北海道瀬棚郡今金町字今金48番地1

TEL 0137-82-3488

印刷 株式会社 札幌支社

---

